

何が彼女を殺したか

新 興 映 畫

原作脚色並監督者 鈴木重吉  
撮影者 鈴木重吉

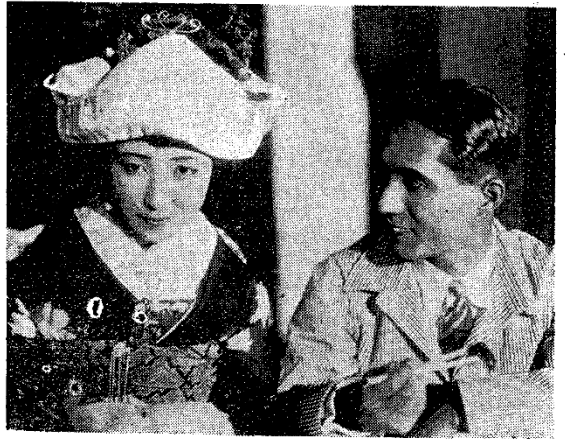
主要役割

中村すみ子 高津慶子  
光明會々長 國城大輔  
市議 酒井健藏 瀨川つる子  
同夫人 津村綾子  
三浦工場主 水澤一平  
妹さとし 生方綾子  
職工長 國分 小坂信夫  
島村おかく 小坂信夫  
刑事 小坂信夫

解説—鈴木重吉氏の「愛すべく」に次ぐ作品で、同氏の前作「何が彼女をそうさせたか」の續篇である。

略筋—重い刑務所の扉がにぶい音を立て、開かれる。天使園に放火して獄窓につながられた中村すみ子は再び人生の廣野に放たれた。行く的でもない彼女がほんやりと足を運入る。街の一角、そこで彼女は一人の男に呼びこめられた。そして導かれたのは免因保護事業を看板にしてゐる光明會の事務所であつた。身寄りもなく働く道も與へられない前科者が生きる一つの道—保護事業とは果してどんなものであつたか。それはたゞ金のみに吸つたる會長の姿そのものであつた。ある日市會議員酒井健藏が、この光明會を訪れチラリと見たすみ子の可憐さに心惹かれた。彼が歸る時洩らした言葉「あんなキレイな娘なら女中に引取つてもいい」といふ一言は直ちに實現することになった。酒井邸にすむことになつたすみ子の生活も併し長くは續かなかつた。ある日彼女が裏口で顔見知りの刑事に訊問されてゐるのを見た酒井夫人は主人がしてゐる不正故に刑事が我家に立廻つたものと早合點した。そして安心出来ないすみ子をそれだけの理由で解雇した。けれども彼女はその後初めて解放された。自由になつたと思つた。そうして幾日か過ぎた。彼女は食ふために何かの働き口を見出さねばならなかつたと思ふ様に見つかるとは思はなかつた。周旋屋で今迄の過去を聞かれる度に漸く彼女は「見えない鎖」がハッキリ解つて來た。汚い安宿の二室で一夜落合つた商人風の男が親切らしく彼女に話しかけた。その男の口から「戸籍や身分證明の要らない働き口」がある事聞かされた時、彼

寫 眞  
「何が彼女を殺したか」帝キネ鈴木重吉  
作品。津村博と高津慶子。



女はやつと救はれたやうな気がした。だがそんな調法な働き口とは一體何か、それは警察の眼を忍んで女がもつた一つのものを賣る。それは密淫賣だつたのだ。彼女が逃れやうとした時は既に遅かつた。彼女が逃られた怪しげな煙草屋の二階、偶然にもそこで顔を合はせたのは嘗つて天使園と一緒にゐた島村おかく—彼女を今のやうな境遇にさせた原因をつくつたあのおかくの變つた姿であつた。「すみちゃん、すまない。お前さんをこんなにしたのはあたしだ。今度はこんな事があつても助け出して上げるよ」虎目をして走るすみ子は夢中で走りつづけた。疲勞さおのいきに疲れ切つて倒れてゐた彼女を救つたのは程近い三浦工場に勤める職工長の國分であつた。かうして彼女は國分の世話で三浦工場の女工として働くことになつた。しかしその幸福もある日工場へ來た刑事が人事係に云つた一言に依つて微塵に破壊されねばならなかつた。失望のあまりよろめく途端、彼女の片腕は廻轉する機械の中に食ひ切られた。すみ子が失つた片腕、それと交換に彼女は何を報ひられたか。治療代五十圓と解雇辭令である。このことは急激に工場を空気に險惡なものとした。日を追ふて熾烈になつてゆく勞資抗争、

温情主義の破たん。ガラ幹の曝露、そうした赤裸々な社會の混にもまれ弄ばれ、そしてありとあらゆる人の心の醜さに憎惡の唾を吐きかけた彼女、中村すみ子は長く、續いた冷たい鐵路に身を横たへたのである。あゝ何が彼女を殺したのだ。